

えーる!

2025.02
Vol.111

長州を支えた「白い和紙」 水道水じゃぬるくてすけない山代和紙

江戸時代、周防国と長門国を領有していた長州藩では、防長三白という産業政策が行われていました。これは「米」「塩」「紙」という3つの「白」を生産することを奨励した政策で、山代地方で生産する和紙は山代和紙と呼ばれ、生産量だけでなく、品質も大変良いものとして有名だったそうです。

特に鹿野地域には「紙見取所」という紙を検収する役所もおかれています。これが盛んであつたことをうかがわせます。

錦川の上・中流域を占める山代地方は、江戸時代、有数の出荷量を誇る和紙の産地として知られています。鹿野もこの山代地方に属し、古くから和紙が生産されていましたと伝えられています。

雪が降ることも珍しくない、寒い冬になりましたね。今月号の「えーる！」では、そんな寒い時期にかかる山代和紙について紹介します。



それほどに隆盛をきわめた山代和紙ですが、明治時代以降しだいに衰退し、戦後には生産が一度途絶えてしまってきました。その製紙を昭和54年に復活させ、現代まで伝えているのが、周南市鹿野高齢者生産活動センターです。

高齢者の就業機会の増大や、生きがいを高め、高齢者福祉の増進をはかることを目的とし、ワサビやコンニャク、餅などの加工や、竹ぼうき、年末年始の飾りなどが製作・販売されています。

問合せ 周南市鹿野高齢者生産活動センター

☎ 0834-68-3640

山代和紙ができるまで

山代和紙の生産は、手に息を吹きかけたくなるような、厳しい寒さの冬に限られます。原料のコウゾやミツマタを、トロロアオイという植物から作つたのりで固めて作る山代和紙は、トロロアオイがのりとしての効果を發揮できる低温でなければ、すぐことができないからです。

化学的に合成されたのりを使えば一年中紙すきを行なうことも可能ですが、あえてのりにトロロアオイを使ふからこそ、紙すきを行う

紙すきのためには、気温の低さに加えて、水道水では「ぬるい」というほどのかたい水が必要だと聞いてとても驚きました。

山代和紙の生産は、手に

息を吹きかけたくなるよう

がキンキンと痛むほど冷た

い水道水が流れる地域で

す。その水道水に保冷剤を

入れ、温度を下げて、やつ

と紙すきを行うことができ

るのだとか。

手がしびれるほど冷たくなった水に、加工したコウゾやミツマタを入れ、簞柄

という道具で紙をすいていきます。

まさに、職人の技といふのにふさわしいお話を聞かせていただきました。

取材に際し、懐紙を購入してみました。薄く水色に

染色された和紙で束ねられた懐紙を触ると、つるつるした面とざらざらした面があることに気付きます。

機械が大量生産したコピー用

紙と比べてみると、厚みも

手触りも、和紙独特の感触

がありますね。紙面に顔を近づけてみると、かすかに

紙すきのためには、気温の低さに加えて、水道水では「ぬるい」というほどのかたい水が必要だと聞いてとても驚きました。

鹿野は、朝にうがいをすると、虫歯でもないのに歯がキンキンと痛むほど冷た

時期が限られてくるんですね。

一枚で使つたり、ハガキのような厚みのある加工品を作るために、3枚、5枚と重ねて使つたりします。

重ねて使用するときは、厚さにムラが出ないよう

植物の香りでしようか。

一枚一枚が手作業で生み出される山代和紙だからこそ、すき上がった和紙それ

ぞれに違つた風合を感じ

ることができます。機械

で大量生産される紙にはな

い手触りや香りは、和紙の大

きな魅力だと感じます。

数百年の時をこえて今に受け継がれ、すかれ続ける

山代和紙。鹿野の育んだす

べきな品がこれからも伝承

されていくよう、心から

エールを送ります！

●和紙のアップ。独特の風合いがすてきです。

●白い和紙も、染色すると鮮やかな色に！

